

平成30年度第1回京丹波町総合教育会議 議事録

- 1 開催日時 平成30年5月17日(木)
開会：午前9時30分 閉会：午前11時29分
- 2 開催場所 京丹波町役場 議場(2階)
- 3 構成員出席者 7名
太田昇町長 松本和久教育長 藤田道子教育長職務代理者 津田勝二委員
上田明成委員 竹内裕子委員 竹吉美公委員
- 4 事務局出席者 9名
中尾総務課長 堂本教育次長 樹山参与 山根社会教育課長
中井学校教育課課長補佐 木下社会教育課課長補佐
原澤総務課課長補佐 小林総務課係長 淵上総務課主事
- 5 傍聴者 なし
- 6 会議の概要

(開会：午前9時30分)

○開会

太田町長挨拶

松本教育長挨拶

○協議事項

(1) 平成30年度京丹波町事業について

- ・平成30年度京丹波町当初予算編成概要について、事務局より説明。

【事務局】平成30年度京丹波町事業について説明いたしましたが、説明しました内容についてご質問・ご意見等がございましたら、よろしくお願ひします。

【構成員】質問・意見なし

(2) 京丹波町の教育について

- ・平成30年度京丹波町教育推進プランについて、堂本教育次長及び山根社会教育課長より説明。

【事務局】平成30年度京丹波町教育推進プランについて説明がありましたが、内容についてご質問・ご意見等がございましたら、よろしくお願いいたします。

【委員】蒲生野中学校で導入された出退勤システムとはどのようなものか。

【事務局】ノートパソコン及びカードリーダーを用いて、教員が出退勤時に自分のカードを読み込ませることで、日、週、月などそれぞれの単位での出勤時間を個人や学校単位で管理できるシステムになっている。

【委員】今後、町内の他の学校でも導入するのか。

【事務局】他の学校でも試行してもらおう。2学期から本格的に稼働する予定である。

(3) 府立高校のあり方検討会議について

・府立高校のあり方検討会議について、松本教育長より説明。

【事務局】府立高校のあり方検討会議について説明がありましたが、内容についてご質問・ご意見等がございましたら、よろしくお願いいたします。

【構成員】質問・意見なし

【事務局】それでは、これより意見交換を行いたいと思います。ただいまの説明内容あるいはそれ以外の内容でも結構ですので、意見等ございましたらお願いします。

【委員】

京丹波町は、予算や取組において、学校教育だけではなく、生まれたときからの子育て支援体制が非常に充実している。子育てや学校教育に関わる新規支援事業が充実し、更に子育てをしやすい町になっていくのだと感じた。

子育て支援課の支援相談事業について話を聞く機会があり、それぞれ課題別の相談事業を開催しているとのことで非常に素晴らしいことだと感じた。その中でおっしゃっておられたのが、時間や経済的な理由で相談事業にも足を運べない方がいらっしゃるということである。そういう方にも目を向けていく必要があるという話を聞き、地域の皆さんにも見守ってほしいと感じたし、ぜひそういった事業を人から人へと伝えていってほしいと思う。町でも広報活動はしているが、人から人へと伝えてほしいという依頼を受けて、そういうことを住民としても大事にしていかなければいけないし、教育委員会としても、ベースにある子どもたちの生活が安定するように支援をする必要があると改めて思った。

少子化について、和知地区で話をする機会があつて感じたことは、少人数であることを活かした取組をスタートしておられるということ。わちエンジェルであれば、年長の子達をリーダーとして異年齢活動をどんどん取り入れているということである。小学校に上がるまでに、自分たちから自発的に何かを計画する取組を重視されていると聞き、これも少人数に対応する取組であると感じた。和知小学校では、少子化が進み、低学年下校と高学年下校が出来なくなった。低学年だけを先に帰してしまうと、家に帰るまでにたった一人で歩かなければならない子がたくさん出てきてしまうということで、今年から全校下校に踏み切られ

た。ところが、高学年は6時間目までの授業、低学年は5時間目までの授業である。その間の時間をどうするのかということで、今年から、低学年の子達が高学年の子達を待っている間、地域を活用して、低学年の子達に色々な活動を経験させておられる。例えば昔の遊びに取り組んでみたり、さつま芋の苗植えをしたり、そういった時間の使い方を地域の方と一緒に始めている。それは少人数であることから低学年下校が出来なくなったということを克服するための学校の工夫であり、素晴らしいと感じた。

和知中学校の場合は、小中一貫を目指した小中連携に取り組んでおられる。今年は、中学校の先生が小学校で授業を行う教科が増えたという話を聞いた。去年まで大きな成果を収めておられるようで、中学校の先生が小学校において学習を進めるということが、「小中の繋ぎ」に非常に効果があったとのことである。これまでは少人数であることのマイナス面を聞くこともあったが、最近では小規模をいかした特色を表現した取組に着手していることを感じ、非常に嬉しく感じた。子どもの人数が少なくなっていくことは仕方ないと考えて、小規模だからこそ出来ることに取り組むなど、須知高校での取組での新しい学科についてもそうだが、発想を転換していくことが大事だと思った。そこに学校の先生方が到達されたのは、これまで地道に様々な取組を行ってこられたからだと思う。マイナスだと思えることを利点に変えていくことが大切である。

【委員】

太田町長が掲げられている「健康の里づくり」の「健康」という部分は、今の現代社会の中で一層深く捉える必要があると考えている。心身ともに健康というのはもちろんだが、社会的に健康な町という面で見たとときに、地域が健康かどうか、学校そのものが健康に機能しているかどうか、これは働き方改革にも通じるところで、そういう見方の尺度をもって今一度私たちが見直していくのはすごく大事なことであると思っている。

また、教育にはバランス感覚が大事である。教育で特に言われるのは、「知・徳・体」や「学校・家庭・地域社会」「不易・流行」などのバランスをどうするかということについて、新しい時代を迎えるにあたって大丈夫なのかなと懸念する。人間の社会が安定するためには、いつの時代も信じられるものや変わらないものがなければ、新しいものは生まれないとと思う。新しいものだけに飛びついていても、それは長続きしないとと思う。

平成30年度の学校教育事業の基本方針の最初にでてくる「京丹波町の良さをいかした」という言葉について、具体的に「京丹波町の良さ」とは何かを共有できているのでしょうか。一般的にイメージを言うならば、「自然が豊か」や「空気がきれい」などが挙げられるが、では「人情」はどうなのか、本当に人情が豊かな町なのかということについて人情豊かでありたいと思うが、それにはものすごく個人差がある。テレビ番組で心を打たれる地域の姿を見ることがあるが、京丹波町では、仲が良い人とは上手くやっているけれども、近所の付き合いはあまりないなど、色々なことが同時に進行している。教育が出来るのは、そういったひとりひとりの親、家庭、先生の「情の部分」と「知の部分」の方向を上手く定めて、常

に発信していったり、子どもの変容を通して、親がもう一度考え方を見直してもらったり、態度を改めてもらったりということに結びつかないとまずいと思う。「京丹波町の良さ」についてもイメージで捉えるのではなく、こういう良さがあるということをはっきり町民に知らしめるには、具体的にどうするかを練らないと、タイトルとしては良いけれども、現実的には言葉が空回りしてしまうのではないかと思う。「京丹波町はこういう現状なので、こうすればもっと良くなる。」や「こんな素晴らしい事例があるので、これを試行する。」というような具体的なモデルを町民や学校に示し、それに向かっていく期待感を見出すことが大事なのではないか考える。

もう一点は、こういった資料では家庭教育のことに紙面を割かれませんが、私は家庭教育が教育の源泉というか源流であると考えていて、人間形成もそこがなければ上手く育たないと思う。家族の内情に立ち入るとするのは難しいことではあるが、外から子どもの様子を見ていて、家庭の中で親子関係が上手くいっているか、家族の温かい愛情に包まれているかなどを見ていくことが大事であると思う。「貧しいながらも楽しい我が家」というのが昔にあったが、今は「貧困」という言葉になって非常に殺伐とした貧しさを感じるが、貧しくてもものすごく良いところが育つと思うし、豊かなことばかりが良いわけではなく、ある意味では、ハングリーに育てるということが非常に大事だと思う。その中に心の通った愛情があるかということはどういう具合に行政として取り組んでいくか、いわゆる予算化して実現するハードな面と細かいデリケートな部分はよく配慮していかないとその予算化が無駄になってしまうことがあるので、一番重要なのは家庭をどのように励まし、支援していくかということである。最終的には、家庭も自立していくことが大事である。

須知高校のリニューアルについては、親の立場からしたら良い先生がいることや良い教育をされていることなどが大切であって、食に関する特色を打ち出していくなら専門学校と何が違うのかなどということになるので、アカデミックな良さやブランド感がなければ長年築かれてきた雰囲気を保つことは難しいと考えている。そういったことについては、学識者と具体的な案をつくっていくステップが必要なのかなと思う。

【委員】

新庁舎や認定こども園など新しい事業が進んでいくということで、京丹波町教育指針についても、平成29年度と平成30年度を比べると中身もだいぶ具体的内容も増えており、色々なことに取り組んでおられる年度だと感じた。以前、ひかり小学校でタブレットを使ったICT機能の有効活用をこれから行っていくということを見て、ひとりひとりに合った学習指導が導入されていく期待感と、黒板を見てノートに書いてという授業で子ども達がどこまで理解しているか分かりにくい中で、機器を使うことによって、「先生と生徒個人の繋がり」が今まで以上に広がっていくということに期待感がある。京都市内のICT機器を活用している高校のPTA会長の方と話す機会があり、機器の導入について、最初はどうかと思ったが、やはり機器を使うことは現代の子達に合っているということを知らせて

もらった。私たちが生活してきた段階では理解することがなかなか難しいが、どんどんICT社会あるいは世界に変わっていく中で、現代の子達はそういう機能を使いこなしていくことは大事だとおっしゃっていて、京丹波町においてもそれに向けての活用が始まっていくし、町から世界へ羽ばたいていく子ども達が色々学んでいく機会がこれからもっと増えていくと感じている。

子どもが少ないという現状の中で、親が共働きの家庭も増えていて、子どもだけの留守番ゆえの事故や事件が起こっている。町内においても、子どもがひとりで留守番をしており、自転車で走っていて交通事故に遭って、親は町外へ買い物に出かけていたということも起こっている。子どもが高学年だからひとりでも大丈夫だという家庭も多く、子どもだけで自転車で遠くまで行ってしまうというのが現状。何年か前に、目で見て分かる「ゾーン30」や防犯カメラ、LEDの街灯が増えてきたことによって危なさが全然違うので、子どもの一人歩きの怖さを軽減してくれていて、これだけ明るかったら安心だなと思うことも多々ある。

須知高校については、自分の子どもが通っていることもあって会議に出たり、以前にも他の校区の会長や高校の校長先生の会議にも出たりしてきた中で、京丹波町だけではなくてどこの学校でも子どもが少ないということで、色々な工夫をされていると教えてもらった。京丹波町においてはホッケーがさかんで、須知高校においてもホッケー部が活躍していて全国大会にも出場しておられるが、子供の減少に伴い、費用が年々減ってきていると聞いた。町としても須知高校としても、ホッケーや他のクラブに力を入れたいけれども費用が減ってくるとなると、これから大きな課題が出てくるだろうということで、難しい現状にあると親として感じた。ただ、地元から関わっている役員の方も多くいらっしゃって、京丹波町内に高校があるということをしごく大きなこととして捉えておられるので、先程おっしゃったように子どもが少ないということをマイナスに捉えるのではなくて、少ないがゆえの独自の取組を発信していく、例えば教育長がおっしゃったように町外から通えるように寮があるなど、プラスに転じていけたら良いなと思う。

【委員】

学校の先生の働き方について、地域の中に学校も開かれていて、地域との繋がりを広げていこうという動きもあるというところで、学校の先生も色々なことを求められて、また、新しいことを教えていかなければならないのですごく大変だなと感じた。ただ、地元に住んでおられる学校の先生もおられる中で、地元住民として地域活動への参加のお声がけをしたが、やはり時間がないので参加できないという返事をいただいたので、学校の先生にも地域の中でどのような活動があって、どういうことをするのかを知っていただくと、子どもたちに伝える上でより良い教え方ができるのかなと思うが、やはりそういったところも今の働き方では、なかなか時間が取れないのかなと思う。仕事としての教育と、自分自身が京丹波町の住民として体験したことから学んだことを教育に活かしていただくという視点を持

っていただけるような働き方の改革に繋がっていけば良いと思う。

また、子どもたちに色々教えていく中や、自分自身が仕事をしていく中で、心の弱さを持つ人が増えてきていると思う。それは、今の時代だからかもしれないし、今のこういったストレス社会だからかもしれないが、今までそういったことに負けることのない自分の強さを学ぶ機会が自分自身もなかったかなど。色々経験した中で、「ここまでのストレスには勝たなければいけない」「時には逃げなければいけない」というようなことは自分が経験したところでしか、自分自身を守ることは出来ないのかなと思う。そこを教育の中で学ぶべきものなのかは分からないが、「自分の生きる力」というところでは、やはり心の体調を崩してしまうまでするよりは、何かそこで自分はここまでは頑張れるけれど、これ以上頑張りすぎると崩れてしまうということを知るような力も育っていくようにしないと、今後の良き人材、期待していく人材が潰れてしまう部分があるので、そういったところも色々な経験を通じて学んでいただくことが子どもの生きる力に繋がっていくのかなと思う。

【委員】

平成30年度の教育基本方針を見ていて、教科としての道徳教育やICT教育など年間を通じて取り組んでおられ、一気に進んできたなと思った。まずは、子どもに伝えていく先生がそれを自分のものとして咀嚼^{そしやく}して、消化していくことが大前提で、そこから教育に持っていくのではないかなと思う。

また、「家庭力」は全てのものの土台となるので、常に意識を向けていく必要があると思う。もうひとつは「地域との関わり」について、京丹波町では、地域の方々に色々なことに取り組んでいただいている、地域と密な関係にあると思う。地域の方々には、主に京丹波の自然や歴史、文化に関する部分を担ってもらっているとは思いますが、地域の中にはIターンの方もおられる。職種も様々で、色々なノウハウも持っておられるので、そういった方々に広く新しい教を請うというような姿勢があっても良いと思う。

須知高校に対しては、私も子どもも母校なので、遠くから見守りたいと思っているが、気持ちとしては、小中高一貫くらいで見てみたいと思う。教育委員になってから思うことは、よく皆さんが「蒲生中は変わった」とおっしゃること。変わる前を知らないのだが、学校訪問の際にとっても良い学校であると感じた。それは先生方が、どういう風にしたら良くなるかということを一生涯懸命考えて、進めていただいたからだと思う。須知高校においても、それぞれの場面で思いや理解を密に共有しながら進んでいただくことをお願いしたい。

公民館図書の充実と図書館建設について、私個人としては、図書館は京丹波町に必要だと思う。図書館というところは、本を貸し借りするだけではなく、図書館から町外や町内に発信していける場所だと思う。そうしたら、人が集まってきて、老若男女問わず色々な人が交流できる場所になると思う。欲を言えば、スペースは広くなくていいので、そういう場所が新庁舎にあれば「自分たちの町の庁舎だな」という親しみを持てる庁舎になると思う。

【町長】

図書館に関しては、私としてもぜひ設置をしたいという思いはある。予算さえ潤沢にあればすぐにでも作りたいという思いであるけれども、認定こども園の関係や次から次へと老朽化する施設への対策が待っているのでは、そこがどうかと思う。やはり庁舎は庁舎として必要だが、すぐになくとも困らないホールや図書館のような施設こそ大事だと思っている。次の庁舎の中には、勉強スペースや町民交流スペースはしっかり取って、書架はなかったとしても自分が本を持ってきて読めたり、参考書を持ってきて勉強できたりするようなスペースはしっかりと作りたいと思って、今設計を見させてもらっている。

去年の今頃、私は一般企業で採用面接をやっていた。今、採用面接では何が一番大事かという、知識はタブレットや携帯端末でどんどん入ってくるので、知っているか理解しているかということは問われなくて、「知識を使って何が出来るか。問題解決が出来るか。」ということが問われていて、グループで何かしたときに「コミュニケーションをちゃんと取れるか」などを見るようなテストの方法や課題の与え方がないかということを考えていた。この間テレビで、そういうことに通じた人は企業に就職しないで、起業するという番組をやっていた。そういう意味では、須知高校は、課題解決では色々なチャレンジが出来るのではないかと思う。ウィードの森の研究や観光甲子園など色々やってもらっているので、そういう取組をいかして、それがさらに進路に繋がるようなことがあれば、より人が来てくれるのかなと思う。食品系など色々な特色を活かした指定校推薦で進路が確保されていたら、もちろん勉強で入ることも大事だが、そういうことも大事だと思う。そうしないと、どうしてもまだ親としても、子供としても知識や5教科重視で大学や進路を選ぶ傾向にあると思う。

今テレビでやっている日本大学のタックルの問題は、大学という教育の場で起こっており、生徒がやっているのでは、何でそんなことが起こるのかと疑問に思っている。「言われたことを絶対服従でやらせる」という教育の方法でずっとやってきていたようである。今朝、購入した本で「ドイツでは審判なしで子どもはサッカーをする」というものがある。ドイツでは、子どもが自分で考えて自主的にサッカーをやっているという話であり、前述の教育の仕方とはだいぶ違うなと感じた。まだ読めていないが、書評に「大事なのは、子どもの『育て方』ではなく『育ち方』である」と書いてあった。一文字しか違わないが、なかなか深い言葉だと思いながら見ていた。教育の面では、自分で色々なことを考えて、いくら指示されても、「良くないことは自分で考えて判断できるような教育」が大事だと思う。

【教育長】

町長がおっしゃった話の「これから求められる人材は、どれだけの知識を持っているかということよりも、それをいかに使うことが出来るか。あるいは、自分の持っている知識と自分が持っていない他の人の知識を統合するというコミュニケーションによって、今あるものから新しい知識を生み出す」ということについて、新しい学習指導要領が目指す学びは、眼目をまさにそこに置いていて、これからの社会を見据えて移行を始めるということでもある。そういう意味では、ベースとなる基礎基本に関わる知識は、従前の基本の問題として

しっかりと学び、学んだものをいかす、あるいは周りとのコミュニケーションのなかで既存の知識から新たな対応する力を見出すということが基本になる。現在進めている京丹波町メソッドはそこに眼目を置いているので、先程申し上げたような新しい指導要領に向けての取組を大事にしていきたいと思う。須知高校も含めて、小中学校の今後も予想される更なる少子化、人口減少の中で、町立小中学校においては、去年生まれた子どもが40人余りであるということを踏まえると、7年後にはその子ども達が入学してくるので、7年先の課題としてどうあるべきか検討すべき時期にさしかかっている。委員さんがおっしゃったように、小規模のデメリットをいかしながら地域との関わりの中で学校のあり方を検討するという方向でこれまでも進んできた。これからも「地域と学校のあり方」について、京丹波町は京都府内の他の市町村の中でも更にきめ細かな施策を打ち出しているの、そういう点では、府内のモデルになりたいというような思いを持っている。それらが持続可能であるのかどうかについては、今後の課題として検討していきたい。

家庭教育の問題について、学校教育は子どもが教育すべき対象であるし、社会教育は来ていただく方が学んでいただく対象である。「家庭教育」という言葉はあるが、家庭を集めて教育するということは他とはシステムの違いもあり正直難しいのだが、今回重要な視点の提起をいただいたので、今後の教育委員会をはじめとする公の事業を始める視点のひとつとして大事にしていきたい。

須知高校の改革については、府が特に地元との連携を大事にしたいというような方針を出している。須知高校については府がやってくれるという立場ではなく、京丹波町および教育委員会が当事者としての意識を持って取り組んでいきたいと思っている。

○閉会

藤田職務代理者挨拶

〈閉会：午前11時29分〉